

## 1. 神・仏・キにおける椿の重用

出羽三山の最奥秘所三鈷沢遥拝所に「紙垂<sup>しで</sup>を結んだ枯らき<sup>き</sup>」なのか？ということについて。椿（図－1・吾が庭）はある面では、神・仏・キの融合や人間の有り様を象徴し、全国津々浦々に自生する植物である。

### （1）神道との関係

神道（神社・神棚）の神事において重用する樹木は、通常は「榊<sup>さかき</sup>」（図－2左）である、地域によっては、あるいは無い場合は、同じ常緑木の椿<sup>つばき</sup>（図－2右）を以って代用するとのこと。榊は我が国最古の歴史書古事記にも登場するという、古くから神事に用いられる植物である。その榊は、ツバキ（椿）科サカキ属である、和名は「ホンサカキ、マサカキ」ともいわれている。サカキの語源については、神と人との境であることから「境木」の意である、あるいは、常緑樹であり「繁る<sup>しげ</sup>」（さかえる）と重ね「繁木<sup>さかき</sup>（さかき）」とする説もあるが、後世の附会であり俗説であるとされている。両者は濃い緑色であることや、厚みと光沢のある質感はとても似ている、ただし、榊の葉の周囲は、つるりとしているが、椿の葉の周囲は細かいギザギザがある。



図－1



図－2

### （2）仏教との関係

その1；島津弘海&北村皆雄共著「修験・羽黒山伏の世

界（新宿書房）」139頁～144頁の中で触れている、火鉢作法（椿<sup>つばき</sup>の葉による精義<sup>せいぎ</sup>）や柴燈護摩<sup>さいとうご摩</sup>において、『椿』を投ずるが、なぜなのか、という問答の中で、図(表)－3のとおりの見解を示している。私は、これは間違っていない、当ってはいらるだろうが、正鵠<sup>せいこく</sup>を得た答えになっていないと思う。

図(表)－3

|                                             |
|---------------------------------------------|
| ・ <sup>1</sup> 羽黒山の神木である                    |
| ・ <sup>2</sup> 椿の葉の破裂音は胎児の安定を促す             |
| ・ <sup>3</sup> 椿はそこにあるだけで再生・生成の象徴として機能しうるなど |

その2；奈良東大寺二月堂で行われる修二会（仏教行事）において椿が登場します。図－4は2019年2月28日付インターネット朝日新聞から拝借したのですが、次のような説明があります。「別火坊にあ



図－４

る千手堂縁側に、白い紙衣を纏った練行衆（こもりの僧）らが集まった。本物の椿の枝をノコギリやハサミで大・中・小の３種に切り揃え、手作りした椿の造花を枝の先に一つひとつ指した。出来上がった花は、二月堂本尊の十一面観音に供えられる。」

修二会是全国的に有名な今に受け継ぐ神仏混淆の儀式ですが、『椿』が重要な役割の一角を担うのです。

その３； お釈迦様が入滅した場所に生えていたとされる木が「沙羅双樹」です。本来の沙羅双樹（フタバガキ科）は、温暖な南方地域でしか育たないため、日本では

夏椿（図－５）に仮託して沙羅の木（沙羅双樹）と呼（なつつばき）

んでいる。夏椿は一日で花を落とす。また、（前者）「夏椿（ナツツバキ）」は、（後者）「百日紅（サルスベリ）」の別名で呼称する地域もある。前者は常緑樹で一日花である、後者は紅葉する落葉樹で百日も咲き続ける、これらの特性から諸行無常と重ねられている。



図－５

その４； 檜しきみは、特に仏教寺院（特に密教寺院）の仏華として、古くから護摩焚き修法、祈願、祈祷、法要に必ず用いられるが、地域によっては、あるいは無い場合は、同じ常緑木の椿を以って代用するとのこと。檜しきみは、花や葉、実、根、茎の全てが毒成分を持ち、中でも種子はアニサチンが多く含まれ、食用すると死亡する可能性があるといわれ、実は植物としては唯一、毒物及び劇物取締法により劇物に指定されている。よって悪霊除けとして使われることになる。樹勢は図－６のとおり。



①



②



③

図－６

### （３）キリスト教との関係

その１；椿は、キリシタン日本二十六聖人殉教者供養のシンボルとして捉えられている。私は、2018(H30)年10月7日(日)～11月2日(金)26連泊27日間（歩行距離910km）で「日本二十六聖人“長

崎への道”」を京都から長崎までスルーハイク（通し歩き）した。　その中でルート設定時参考とした「日本二十六聖人“長崎への道”巡礼Map」に次のような記述がある、「・・・　この二十六人の殉教の後、長崎のキリシタンは、二十六本の十字架が立ててあった穴に常緑樹の『つばき（椿）』を植えた」と云われています。そこで、「日本二十六聖人“長崎への道”」の巡礼シンボルマークとして、図－7のと通りの『つばき』を設定しました。・・・」　その意味合いの一部は次のとおりと書かれている。

- ◎1　赤い花は殉教の血
- ◎2　26のめしべは殉教者数
- ◎3　4枚の葉は十字架
- ◎4　葉の緑は復活



図－7

なお、諸文献等に触れると、キリスト教（カトリック信仰）は椿を聖樹・霊樹と見做しているようである。キリスト教と椿の縁（関係）については、長崎地方における種々の情報がインターネット上にある。

その2；ネット「<http://sawarabi.a.la9.jp/>」サイトにある高山右近の山里で発見された「マリア十五玄義図」（図－8）には、椿を持つ聖母が描かれている。



図－8

その3；長崎県五島市のホームページには、図－9のように「椿はキリスト教信者にとってシンボルであった」のフレーズが載っている。



図－9

## 2. 椿を神聖な宗教祭儀に取り入れる根本理由は如何に

### （1）皆さんの見解

その1；前記図(表)－3においては間接的な状況証拠というような言い方である。そもそも、なぜ、椿なのかという根本についての説明がされていない。

その2；レファレンス協同データベース——国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築している、調べ物のためのデータベースをいう。——に次のようなQAがある。質問(Question)；東大寺のお水取りでの花ごしらえでは、なぜ椿のモチーフが用いられるのかを知りたい。回答(Answer)；ずばりの回答は出てこなかった。

その3；「夏椿」についてもインターネットで調べて見たが、そもそも、なぜ、椿なのかという根本についての説明がない。

### （2）私の考察

#### a. 吉凶（陰陽）両面同居<sup>どうご</sup>

以下のように、根本的に椿には、人間から見た吉（陽）と不吉（陰）の相反する様相を同時内包しているものであるという見方・考え方があると思う。

○ [陽] まずは、椿の樹勢については、次のような特徴を有しており、縁起が佳い吉なものとして重用されている。

- ・冬枯れしない艶やかな常緑樹で1年中美しい緑色の葉を付けている。
- ・その成長はじっくりで寿命が長い。(数百年?)
- ・樹木は油気を有しており、葉は生でもパチパチと音を立てて燃える。

● [陰] 椿の花は、次のような特徴を有し、人の首が落ちる様子や死、落馬、落選を連想させるために、不吉なものとされて忌避される一面がある。

- ・椿は開花時の子房が果実になるが、その命を繋ぐための実(種)を残しつつも、椿なる存在感の象徴・花卉は丸ごとポトリと落ちる。徐々に弱々しくなって、しおれて老衰に傾きつつ、醜くなってからしかたなく落ちるのではなく、生氣盛りの勢いを保ちながら、無風であっても、ある瞬間にポトリと落ちる、役割を終えた花の一瞬の絶命である、満開・最高潮で絶命である。

◎ [中性] ポトリ落下の様相は、「びんぴんころり」そのもので、潔い引き際の良さを印象付ける。

#### b. 私の考える『椿』の宗教上共通的意義

その1; 以上を以って、椿の特徴と人間界の特性とを重ねて整理すると次の図(表)－10のとおりとなる。

| 図(表)－10                   |                                               |               |
|---------------------------|-----------------------------------------------|---------------|
|                           | 対称的特徴                                         | 陰陽二元相対原理      |
|                           | □1; 艶やかな常緑樹は、生命の盛んなる若さや不老長寿の象徴です。⇒永遠の生命→再生もどき | 吉・生⇒清<br>[陽]  |
|                           | □2; 盛りの勢いを保ちながらある日、突然、花はポトリと落ちます。⇒生命の死滅→疑死もどき | 不吉・死⇒濁<br>[陰] |
| 一つの椿は陰陽統合体、陰陽二元同根の世界と重なる。 |                                               |               |

その2; 特に仏教上の側面に着目する。図(表)－11を参照のこと。一つの「もの・こと」を分別知(差別相)と無分別智(平等相)の両面から捉える力を養成すべきであるという訓えである。私は、前半の教えに分別知(差別相)の世界を、後半の教えに無分別智(平等相)の世界を重ねて理解している。つまり、人間は、諸行無常、是生滅法の分別知(現実・煩惱、分別知)を超越して、生滅滅已、寂滅為楽の無分別智(理想・悟り、無分別智)に至りたいとする向上心のある動物であるが、他方でそれ故に両界を往来・苦悶する動物でもある。このような人間の特性に重なる植物を思索した、人間と共通する植物を探した時に一致したのが『椿』ということではなかろうか。

この世は「諸行無常」です。極簡単に言えば、「この世の万物は常に変化していて、しばらくも留まることがない、常がない。」ということを意味する言葉です。

釈迦の最期を描いた仏教經典の一つである「涅槃經」の中に「諸行無常偈」4句として「諸行<sup>しよぎょう</sup>無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅<sup>じやくめつ</sup>為樂」が書かれています。

前半2句は「諸行は無常であってこれは生滅の法である。(万物は変化し続け生きているものは必ず消滅するという真理<sup>さと</sup>)」を諭し、

後半2句は「この生と滅とを滅し終って、寂滅は即ち涅槃に入り是れ樂なり。(その生滅の移り変わりを超越して煩惱がなくなると、悟りの境地で安樂を感じることができる。)」

といった生き方を説いています。

その3；修験道から見た椿の意義について着目する。修験道の世界は諸宗を混合していますが、背後にある明確な筋は陰陽二元相対(待)原理に基づく一現実界の分別知と真如界の無分別智を見極めて、また、双方を融通無碍に往来出来る験力・体現力の養成にあると思っている。人間は生まれれば死に向かう宿命を持つ、一つの身体に死と生が同時混在した、死と生が闘ぎあいながら一つを成している姿、あるいは、清濁混在が真の実相である、すなわち、身近な中で生死同居風の椿の姿そのものと一致することに着目したということではないか。分別知界の煩惱を焼き尽くし、無分別智に止揚するための護摩修法(護摩焚き)において、<sup>ほのお</sup>炎に至強の悪霊粉碎力、邪気退散加持力を吹込むための呪術が椿を火炎に投ずる入魂儀式だろう。なお、出羽三山山伏修行に係る三鈷沢遥拝所においては、焚き火は出来ないことから、「護摩焚き修法の象徴・代用としての『椿』小枝に紙垂を結んだものを持って行った、置いて来た。」ということであろう。紙垂を結んだ意味は、三鈷沢に持参する椿には、祓い清めの儀式を以って神通靈力を与えたという印であろう。

### 3. 椿と共にある諸相から学ぶこと

その1；私の言葉でいう修行とは「自噴する向上心を錬磨し、真善美の良心を取り戻し、研鑽に励み自らを高めることである。今の自分に拘泥せず、一時<sup>いつとき</sup>あえて今の自分を否定(擬死)し、生まれ変わった新しい自分を取り戻すこと(再生)である。」この基本を踏まえた訓え、あるいは学びは次のとおりである。人間は、生まれた翌日から死に向かって行くようなものである。生きていれば、諸々の禍事・罪・穢れ・咎<sup>とが</sup>に塗れて行くものだが、幸福招来軌道に乗るには、それらを払い除け清め・浄化しなければならない、つまり、謙虚さを取り戻さなければならない、そのための自己研鑽が修行である。そこで、死をも覚悟の苦難・過酷に身を投じ、その中で自らを省みて、次に新しい生き方の覚悟を以って、もう一度娑婆に戻るための再生・復元の儀式である。

その2；神事においては、<sup>さかき</sup>榊を主として、椿や山茶花、<sup>かし</sup>檜、ヒイラギ、杉などを代用して来た。他方、仏事においては、<sup>しきみ</sup>榊を主として使って来た。なお、<sup>しきみ</sup>榊を神事に使う神社もあるとされる。その中

で、羽黒修験においては、なぜ椿以外のもの——榊や櫨などは使わないのか、あえて椿を使うのか？という視点を私は大事にしたい。『生』だけの一義的要素であれば、椿でなくても良かったはず。また、普通に老いて『死』だけの一義的要素であれば、椿でなくても良かったはずである。

しかし、椿がそれらと決定的に違うのは、「身に着けている花が、その盛りにおいて、突然ポトリと落ちる、落ちて身体に異常なし、果て朽ちる予兆の紅葉もしない。」ことである。人間界に重ねれば、様々な理由・原因があるにせよ、ある日突然、“不慮の災難や不幸に遭遇する、死の襲来に直面する”悲しい厳しい現実がある。つまり、諸行無常と生老病死の四苦からは免れないこの世の儚さと重なる。逆説的には、そのような突然の不幸来襲による苦痛・苦難を乗り越えて行く生命力を錬磨しなければならない決意の発揚をも意図する。それらの背景があって護摩焚き修法の中で椿を燃やすのだと思う。言い換えるが、脂ぎった常緑厚手の葉を持ち華やかな花を抱える姿は人間の勢力<sup>みなぎ</sup>漲る状態の生き写しである、ところが、その身体が弱体化、枯れることのない状態の中で、元気ある花（子孫繁栄の果実を付ける）が、ある日突然、ポトリと落ちるのである。諸行無常の象徴である。つまり、『生』と対極にある『死』の要素を同等のエネルギーを以って体現（表現）しているのである、すなわち、椿は相互対極・相対にある『生』『死』の統合体の象徴物でもある、として有意義なのである。

その3；結論的に言えば、『椿』を重用する意図は、人間は、陰陽二元（表と裏、建前と本音、外形と内情、仏性と魔性、・・・∞）を抱え、悶え足掻き自らが煩惱を生産し、生老病死の生と死に慄きながら生身が呼吸している。この蠢<sup>うごめ</sup>きを象徴する究極・対極の「生と死」に重ねる、重なるのが『椿』なのである。よって、これらは陰陽二元相対原理に繋がる思想を踏まえた一つの秘儀、呪術であった、生きながらにして、生死を超越した解脱・悟りへの菩薩行の象徴としたのだろう。

#### 4. 椿と榊の生命力

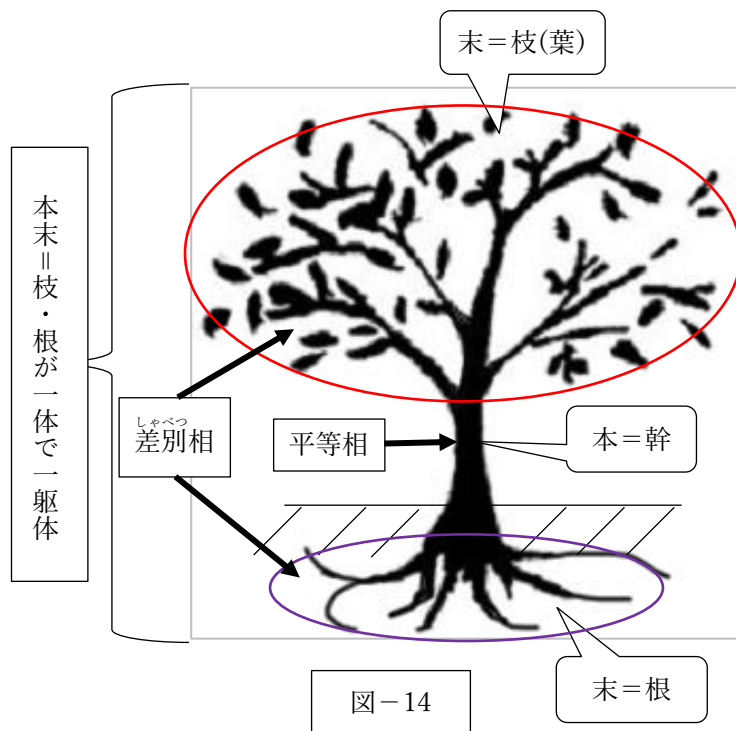
我が家の庭にある椿と榊の小枝を、水を差した花瓶に入れて様子を見た。1か月ほど経過したら図-13のとおりで手前の榊は枯れた。椿は枯れる兆候がまったく見えず益々瑞々しくなりつつあった、生命力に恐れ入る。つまり、椿は挿し木 OK なのである。神社の神職は御幣を振ったり、榊を振ったりするが、そのご利益は長続きしないということである。だから、何度でも神社に来いということなのでだろうか。



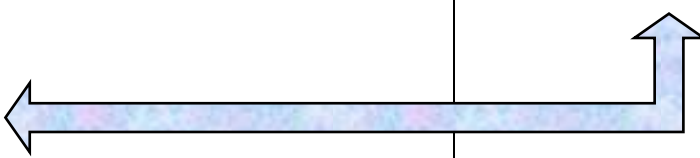
図-13

#### 5. まとめ

図-14に記述した樹木の「枝・根と幹<sup>えだね</sup>」に対する見方と、『椿』重用の裏側に潜む哲学的思想を合わせて整理し、三つの切り口から対応関係を図(表)-15により表現して見た。逆に言うと、古来、生身の人間の生き様、有り様に係る哲学思想論における大きなテーマである「分別知と無分別智<sup>しゃべつ</sup>、差別相（界）と平等相（界）」の象徴が、身近な樹木の『椿』とぴったり重なるということに気付き、昔々からの宗教者は重用して来たのではないだろうか。ただ、明確な認識は無くても良かったのであろう。この言い方



は、仏教世界のことと限定的に捉えがちであるが、私の浅学菲才、語彙の不足であり、神道やキリスト教の基層に相通じるものがあるはずだと思っている。

| 図(表)－15                                                                              |       |                |       |       |       |
|--------------------------------------------------------------------------------------|-------|----------------|-------|-------|-------|
| 一つの「もの・こと」を三つの切り口                                                                    |       |                |       |       |       |
| 分別知                                                                                  | 合せて全体 | しゃべつ<br>差別相（界） | 合せて全体 | 枝・根   | 合せて全体 |
| 無分別智                                                                                 | 合せて一つ | 平等相（界）         | 合せて一つ | 幹     | 合せて一つ |
| 認識の有り様の世界                                                                            |       | 仏教の世界          |       | 樹木    |       |
| (精神界)                                                                                |       |                |       | (物質界) |       |
|  |       |                |       |       |       |
| 統一性を樁の姿に                                                                             |       |                |       |       |       |

## 6. 樁を取り入れた替え歌

前記3頁で触れた「日本二十六聖人“長崎への道”」スルーハイクにおいて、原爆被災地の広島平和記念公園および長崎平和公園に立ち寄り、慰霊を込めて「折り鶴」の原曲と替え歌を歌い奉納した。その時の替え歌の楽譜（詩を創作）を次頁図－16に記載する。なお、出発前に事前に作成したものである。その歌詞の中に私の syncretism(シンクレティズム)宗教観の象徴としている「樁」を挿入した。

R22 (長崎遊学紀行No3) 「神様・仏様・キリスト様」の愛

(原曲は「折り鶴」の替え歌)

い き て - い て よ か っ た そ れ を か ん じ た く て ヒ ロ  
し - み を こ と ば に かな し み を い か り に き ず

1. や お よ ろ ず の か み さ ま あ な た の お つ と め は ま じ  
ビ - の お ち か ら で ケ ガ レ を は ら い た もう せ い

2. だ い に - ち ほ と け さ ま あ な た の お つ と め は ぼ ん  
わ - れ し が ら み の じ ゅ ば く を と き ほ ぐ す む -

3. イ エ ス - キ リ ス ト さ ま あ な た の お つ と め は う ち ゅ  
し - く そ い ね す る む し ょ う の ふ か き あ い ひ と

シ マ の ま ち か ら わ た し は あ る い て き た く る  
つ い た か ら だ で こ こ ま で あ る い て き た こ の

1 か な し ぜ ん - の い し や き ぎ に も や ど リ ム ス  
め い せ い ち ゅ く を あ ま ね く - た れ て ま す そ の

2 の う くる し み の し ゅ う ちゃ く の き ば を め き と ら  
く う で そ め よ - と う ら ま で - ま わ り ま す そ の

3 う の そ と に た ち あ め つ ち の せ い め い に や さ  
よ を さ ば か ず に ひ と し く - つ つ み ま す そ の

み み を ふ さ い で も き こ え る こ え - が あ る こ の  
こ え は と も な り し ひ と つ に か ら - み あ い そ の

こ こ ろ と ぎ し て も あ ふ れ る あ い が あ る は ば た  
こ え は な み に の り こ こ ろ に し み て く る み ん な

け (は ば た け) お り づ る (お り づ る) わ た し か ら あ な た へ は ば た  
を (み ん な を) い の ら む (い の ら む) う ち な り の た ま し い こ こ ろ

け (は ば た け) お り づ る (お り づ る) あ な た か ら せ か い へ  
に (こ こ ろ に) つ ば き を (つ ば き を) お お ら か に そ だ て ん

1. 八百万の神様 あなたのお勤めは  
ま近な自然の 石や木々にも宿り  
(注1)「ムスビ」の御力で “ケガレ”を祓い賜う  
「清明正直」を 遍く 垂れてます
2. 大日 仏様 あなたのお勤めは  
煩惱苦しみの “執着”の牙を抜き  
捉われ、しがらみの 呪縛を解きほぐす  
無・空で染めよと 裏まで 廻ります
3. イエス・キリスト様 あなたのお勤めは  
宇宙の外に立ち 天地の生命に  
優しく添い寝する 無償の深き愛  
人世を裁かずに 等しく 包みます
- .....
- その声は共鳴りし 一つに絡み合い  
その声は波に乗り 心に沁みて来る  
みんなを祈らむ 内生りの 魂  
心に(注2) 椿を 大らかに育てん

図-16

(※1)「ムスビ」とは、万物の生命・靈魂の繁殖・繁栄をいう。  
(※2)「椿」は、私の syncretism 宗教観の象徴とする。

※1;楽譜直下の歌詞は、原曲－(歌唱;梅原司平/作詞・作曲;梅原司平)の1番の歌詞  
※2;替え歌の詩は大沼香作 2018(H30)年10月5日(金)

(end)